神の武具を身につけて(4)戦いの場　　**エペソ 6:10～18**

1)霊の戦い

クリスチャンは信仰の戦いを戦っています。自分の不信仰や不従順と戦い、人間の欲望や悪の力が支配するこの世と戦っています。ヤコブの手紙に「世を愛することは神に敵することである。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としている。」（ヤコブ 4:4）とありますが、クリスチャンは、神を愛するのか、それともこの世を愛するのかという選択をせまられています。信仰を成長させたいと願えば願うほど、神に対して真実でありたいと願えば願うほど、自分の不信仰や、世のものに対する執着との戦いをより多く経験します。そして、そうした戦いを通して信仰は成長していくのです。

クリスチャンは信仰の戦いとともに霊の戦いを戦っています。クリスチャンは、神に近づこうとすればするほど、自分を神から引き離そうとする力を感じます。クリスチャンを失望、落胆させたり、疑いの中に投げ込んだり、神に従う勇気をくじいたり、霊的に怠け者にしたりするなどの誘惑を体験します。

とりわけ、伝道しようとすると、霊的な戦いをより強く感じます。「神が人間を愛し、イエス・キリストを罪からの救い主として遣わしてくださった。自分の罪を悔い改め、キリストを信じるなら、人は救われる。」というのは、「四つの法則」という小さなパンフレットに書き表わすことができるほど単純な真理です。しかし、多くの人は、この福音を聞いた後、すぐに自分の罪を悔い改めてイエス・キリストを信じようとはしません。なぜなのでしょう。伝える側のこちらの問題なのでしょうか？　確かにそういう面があると思います。しかし、そのことに関してパウロは神の敵、信仰の敵であるサタンが人々の心を固くしているからだと言います。そして伝道は、たんにメッセージを伝えるだけのものではなく、聞く人の心を固くしているものとの霊的な戦いでもあることを教えています。そうしますと伝道についても私たちの考え方を変える必要があるのではないでしょうか。使徒パウロはコリント人への手紙第一で「兄弟たち。私にとって、毎日が死の連続です。これは、私たちの主キリスト・イエスにあってあなたがたを誇る私の誇りにかけて、誓って言えることです。もし、私が人間的な動機から、エペソで獣と戦ったのなら、何の益があるでしょう。」（コリント第一 15:31-32）と書いています。パウロは二年三ヶ月にわたってエペソで伝道しましたが、そのエペソで「獣と戦った」と言っています。ここでいう「獣」はライオンや狼などといった実際の動物のことではなく、悪魔や悪霊のことです。パウロはこの伝道の戦い、霊の戦いを「エペソで獣と戦った」ということばで描写したのです。「霊の戦い」の教えは、決して現代に通用しない教えではありません。今日の私たちも、実際は、エペソのクリスチャンと変わらない霊的な戦いの中にあるのです。私自身に対して、私たちが福音を伝えたい相手に対しても悪魔は攻撃してくるのです。私達が福音に対して無関心でいる時、神様なんていなくてもやってゆけると思っている時に悪魔は安心しています。放っておいても神様から離れてゆくからです。

２）霊の戦いの備え

聖書は、霊の戦いへの備えを六つの武具で表わしています。「真理の帯」・「正義の胸当て」・「平和の福音の備え（靴）」・「信仰の盾」・「救いのかぶと」・「御霊の剣」です。六つの武具についてはすでに学びましたので繰り返しませんが、これらの武具について、覚えておきたいことが二つあります。それは、この神の武具は、敵に立ち向かうときはじめて役に立つということです。六つの武具をよく観察してみると、どれも、正面を守るものばかりで、背後を守るものはありません。胸当てはあっても「背当て」はありませんから敵に背を向けたら、たちまち火の矢が背中にささります。盾は、正面に構えるものであって、敵から逃げ出したなら、大きなものだけに、邪魔になるだけで、何の役にも立ちません。これらの武具はすべて、しっかりと敵に向かう時だけ力を発揮します。

悪魔は、私たちの弱さを知り、私たちよりも大きな力を持っていますから、自分の力で彼に立ち向かおうとしても、悪魔にあざ笑われるだけです。しかし、悪魔は全知全能ではありません。神の武具には彼の

知らない大きな力があるのです。悪魔は、私たちが彼に立ち向かう姿を見て、最初は私たちをあざ笑うでしょう。しかし、私たちが身に着けている武具、手にして武具を見るとき、それが神の武具であることを知って、逃げ出すのです。私たち自身は弱くても、神の武具には力があります。悪魔に背を向けるのではなく悪魔に立ち向かうのです。「そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去」るのです。

もうひとつのことは、この六つの武具は、すべて身につけ、手にする必要があるということです。エペソ 6:13 に「神のすべての武具を取りなさい。」とあります。「すべての武具」と言われているように、霊の戦いには六つの武具すべてが必要なのです。真理の帯はつけたけれど、正義の胸当てはつけない、福音の備えはあるが信仰の盾はない、救いのかぶとは持っているが、御霊の剣は持っていないということがないでしょうか。私たちは、「神のすべての武具」を身につけ、手にしているでしょうか。どこか欠けているところがあると、サタンはそこを狙ってきます。身につけていないものはないだろうか、取り忘れている武具がないだろうかと、もう一度、自分を点検してみましょう。

３）霊の戦いの戦場

では、神の武具を身に着け、手にした兵士は次に何をするのでしょうか。18 節に「あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」とあるように、祈るのです。では、クリスチャンは祈るだけで、せっかく手にした信仰の盾を使わないのでしょうか。救いのかぶとや御霊の剣も脇においておくだけなのでしょうか。いいえ、そうではありません。クリスチャンは祈りの中で霊の戦いを戦い、祈りの中でサタンに立ち向かいます。六つの武具は祈りのための身支度でもあり、祈りのための武具でもあるのです。「祈る」ことが霊の戦いを戦うことであり、クリスチャンは祈ることによってサタンに立ち向かうのです。主イエスは、荒野での断食の祈りの中で、またゲツセマネの園での血の汗を流しての祈りによってサタンと戦い、勝利を収められました。使徒パウロが経験したエペソでの悪霊との戦いもまた、祈りによるものだったことでしょう。歴史を見ますと、多くの聖徒たちは祈りの中で霊の戦いをし、そして、勝利してきました。

では、霊の戦いの祈りとはどんな祈りなのでしょうか。それは普段の祈りとどこが違っているのでしょうか。18 節を読む限りにおいては、そこには、断食して祈るとか、夜を徹して祈るとか、あるいは、大声で祈るとか、大勢で祈るなどいった特別な指示はありません。むしろ、「絶えず…祈りなさい。」とあって、日々の祈りの大切さが強調されています。絶えず祈り続ける者でありたいと思います。

つぎに、18 節には、「御霊によって祈りなさい。」とあります。聖書にあるように、御霊は、私たちがどう祈って良いか分からないときも、私たちの祈りを導いてくださるお方です。あまりにつらいことに出会うとき、祈らなければならないと分かっていても祈れないという体験をすることがあります。そのような時にこそ、聖霊が助けてくださいますから、とにかく、口を開いて、神を呼ぶことです。「神さま、私は、祈れません。」というのも、立派な祈りです。不思議なことに、正直に主の前に出るなら、後は、聖霊が祈りを導いてくださるのです。また私は今まで、時々、人生の中で大きな決断をしなければならない時、執着心ゆえに何かに強い願望が起きた時に祈りの中で、あえてすべてを白紙に戻すということをやってきました。これは思考停止とか責任放棄ということではなく先ず神様にすべてを委ね、神様の御心が私の考えていることと合っているなら神は進めてくださるだろうし、合っていなければ消えてゆくと思っています。例えば、献身して神学校に進むと決意した時もそうです。教会の働きをするとしても例えば行ったこともないアフリカの奥地に神様が送ると言われたらどうしよう。当時はまだ独身でしたから将来、結婚出来なかったらどうしよう？いろんな思いが起こってくる中で、つまりそこに悪魔が、そして自分自身の罪が様々に影響してくるわけです。そして最終的に神様に全てをお任せするというように聖霊によって導かれたわけです。

また、「御霊によって祈る」ことによって、私たちは習慣的な、決まりきった祈りから、さらに深い祈り、神への悔い改めのことばや、賛美のことばが自分の口から出てくるのを体験することが多くあります。

私たちは、祈るとき、必ずといってよいほど、「天のお父さま」「父なる神さま」と呼びかけ、「主イエスのお名前で祈ります。」と祈りを結びます。祈りを聞いてくださる「父なる神」を思うこと、私たちの祈りを父なる神に届けてくださる「主イエス」を覚えることは、祈りにおいて無くてならないことです。しかし、もう一人のお方を忘れてはなります。私たちに祈る力を与え、私たちの祈りを導いてくださる聖霊です。祈るとき、聖霊を覚えましょう。私たちは「聖霊によって、父なる神に、主イエスのお名前を通して祈る」のです。そのような祈りが、そのような祈りだけが、霊の戦いに勝利を得させる祈りとなります。

最後に、「すべての聖徒のために」ということばを心に留めておきましょう。「すべての聖徒のために」ということばは、霊の戦いが決して、一対一の戦いではなく、すべての聖徒たちが共に、悪魔の軍勢に立ち向かうべきものであることを教えています。ですから、クリスチャンは、心をひとつにして祈るのです。使徒ペテロが捕まえられ、牢に閉じ込められたとき、教会は心をひとつにして祈りました。その祈りは神に届き、ペテロは御使いによって牢から救い出されました。迫害の中にあった初代教会のクリスチャンは、互いに互いの祈りを必要とし、それを実行してきました。自分自身の信仰生活は自分自身の信仰と祈りによって歩んでゆくことは出来ません。誰もが他の兄姉に祈ってもらう必要があるのです。自分のために祈ってもらおうと願うなら益々、他の兄姉のために祈る必要があるのです。他者のために執り成して祈るということが自分に返ってくるのです。

今週も教会の兄弟姉妹が霊の戦いに勝利できるように互いに祈り合ってゆきたいと思います。